

焦りもしていない顔でそう言われながら、くちゅり、くちゅりと孔内を混ぜられる。

「あああ…♡♡ん…っ♡んう……っ♡だめ…え…っ、！」

裸の下半身をびくッびくッと震わせながら、寮長の指淫に耐える。

今いる廊下には片側に等間隔で扉がズラリと並んでおり、その向こう側は生徒たちの部屋なのだ。

「ふふ……貞操帯つけてきて良かったねえ。無かったら、このカーペットに精液お漏らししちゃってたね」

「あああ…っ♡♡いやあ……っ、ああ…っ♡♡♡」

寮長は奥のほうまで指を挿しいれてきて、半ばほどにあるあの少年の弱い場所まで擦り上げてくる。

「さ、行くよ」

かと思えば彼は何事もなかったかのように立ち上がり、ふたたびリードを引いて歩き出した。

びくびく跳ね続ける腰周り——特に縛^{いまし}められている幼莖がつかなくて仕方がない。